

⑤5年生の実践記録

ア. 本年度の取り組み

「食」を材に、1学期は育てやすい野菜（二十日大根）を育てることを「試してみる」→2学期は専門家と一緒に野菜を「よりよく育ててみる」→3学期は野菜を育てて得た経験や知識を生かして「自分たちにできることをやってみる」という単元の流れで行った。



1学期は、自分たちの力だけで二十日大根を育てることに挑戦した。牛乳パックやペットボトル、プランター、畑などの育てる場所を自分で選び、毎日面倒を見る姿も見られた。しかし、水のあげすぎや土の量などが原因で、大多数の子供の二十日大根が上手く育たなかった。原因を各自で考えたり、JAの方の話や農家さんの話を聞いたりして「よりよく野菜を育てるためにはどうすればよかったのか。」「次は、野菜作りを成功させたい。」という子供たちの思いも高まっていった。



2学期は、1学期で得た知識や経験を生かして、自分が育てたい野菜を育ててリベンジしたいという子供たちの思いから、育てたい野菜ごとのグループで野菜を育てる活動に取り組んだ。2学期から育てられて、自分たちも育てたい野菜を子供たちと対話をしながら出し合い、にんじん、小松菜、白菜、カブ、ほうれん草、大根、リーフレタスの7種類の野菜の中から育てることになった。1学期の取り組みで得た経験や農家さんに野菜を育てるコツを聞くことを通して、土を耕すことや野菜の面倒を毎日見ることの大切さに気づき、農家さんの苦労や努力を実感していた。気候の変動に左右されながらも試行錯誤しながら、野菜栽培に真剣に取り組んでいた。自主的にクラスの垣根を越えて野菜をよりよく育てるコツについて情報交換する児童やなかなか芽が出ず人工栽培にチャレンジするグループなどもあった。1学期から2学期にかけて、野菜をよりよく育てるために根気強く取り組む姿勢が見られるようになった。



3学期の構想としては、野菜を育てて得た経験や知識を生かして自分たちにできることをやっていく。1・2学期の経験を基に子供たちが興味や関心を抱いた「食」に関連してできることに取り組み、「食」に対する自分なりの思いがさらに強いものになることを期待している。子供たちは、これまでの活動を通して野菜を育てることの難しさや農家さんのすごさを実感している。その思いを形にできるような取り組み3学期を通して取り組み、自分の思いが形になる喜びや達成感をもてるようにしていく。

5学年として、対人関係がより複雑化すると共に、友達と同じ目標に向かって話し合いを通して、試行錯誤したり、協力したりすることができる。そこで、グループで協力することや情報交換の重要性を実感できる本単元のグループの中での取り組みは、価値のあるものになった。意見が対立するときにはどのように対処するかを学ぶ機会にもなっている。「食」の単元として、子供たちにとって身近で当たり前のようを感じるものこそ丁寧に取り上げて、「食」に対する思いを強いものして行ってほしい。野菜を育てることは、気候に左右されてしまったため子供にとって難しさを感じてしまう場面があった。

イ. 実践しての成果 (○) と課題 (●)

【児童】

- 2学期に育てる野菜を自分で決めたことで、主体的に課題解決に向けて、試行錯誤し、実践しようとする態度が身についた。
- 農家さんと交流することで、野菜をより真剣に育てようとする姿が見られた。
- 1学期の失敗からのスタートだったため、モチベーションが低くなっている児童がいた。

【教師】

- 事前にフィールドワークをしたことで、地域の農家さんとの繋がりができた。
- 野菜を育てる上で必要な道具や材料を柔軟に用意することができた。
- 子供の要望に対して、どこまでやっていいのか判断に迷う事があった。

ウ. 来年度に向けて

- ・1学期に農作物を育てる際に、成功からスタートできるように子供のモチベーションを高く維持できるようにサポートすること
- ・気候に左右されやすいため、失敗があることを覚悟してチャレンジすること